「いや、いや、今夜子の刻に、この屋敷の上で、火霊が飛び上り、右往左往しているので、内部に何か異変が起きたのではないかと案じましたので、かけつけたのですが。」

と、いいながら

「何かあったのではありませんか。」

と、尋ねました。男は〃ホッ〃と安心して、今夜の出来ごとを、ありのまゝに、つゝみ隠さず、お坊さん達に話しました。この話を聞いて、品のよいお坊さんが、進み出て

「お話の中で、怪物の頭に、打ちおろされた扇子を拝見出来ませんか？」

と申し出られましたので早速腰の扇子を抜いて、お渡ししました。

お坊さんは、ていねいに扇子を、おしいただかれて、おもむろに扇子を開いてごらんになりました。

その扇子の中には、〃南無阿弥……〃と書いてあったのでした。

翌日、老婆が法事から帰って来て、語ったところによりますと、「この家は、代々仏教だったのですが、今年の春、おじいさんが亡くなった時は、廃藩後の寺院の取りこわしで、神教改めとなり、葬式も神式で行ったのです。それで、おじいさんの霊も浮ばれず、迷ってしまって、家に居ついたものと思われます。」

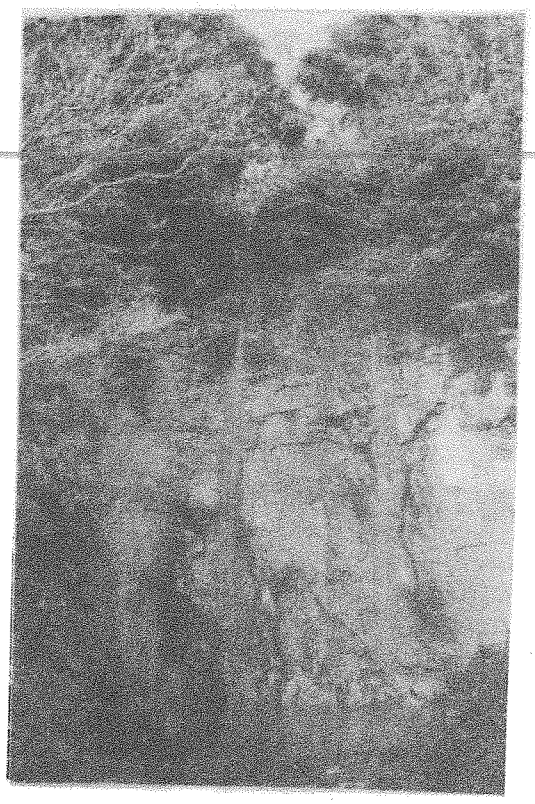
と、いうことでした。

当時この家の付近は、寺院が多く、この三か寺の外、日光院、高月院、宝福寺、西迎院、覚正寺などがありました。

お鶴が滝

永谷　松岡政策

永谷の国道十号線沿いに、お鶴が滝と呼ばれる、高さ十数米余りの滝があります。その昔から、水が豊かで枯れることがなく、年中水音高く流れ落ちています。



昔、上永谷に、お鶴さんという、気立てのやさしい、大変美しい娘さんが、住んでいました。村の若者たちは皆、お鶴さんを、お嫁にほしいと思っていました。

ところが、ある夏の晴れた日のことです。お鶴さんは滝の上の岩場で、洗濯をしていましたが、ふとしたはずみに、洗濯ものが手もとを離れ、流されはじめました。慌てたお鶴さんは、前後を忘れて、足を大きく踏み出し手をさしのべて、洗濯ものをとろうとしました。そのとたん、つるりとすべって、川の中に、押し流されてしまいました。

この岩場は、年中青のりが生えていて、手がかりが、何一つないので、たまりません。

アッ。という間に、真逆さまに、滝つぼに落ちてしまいました。

村人達は、これを聞いて大騒ぎになりまし

た。早速滝つぼや、川下の方を探しましたが、どうしても、お鶴さんを見つけることが、できません。村人たちは不思議に思いましたが、仕方なく引き上げることにしました。

それから数日後のことです。数キロ離れたとなり村の日置の水神様の池に、息の絶えたお鶴さんが、浮いているのがみつかりました。

古老の話によると、水神さまの池と、お鶴が滝の間はなぜかつながっていると、いいつたえられていたというのです。

上永谷の人々は、お鶴さんを、大変可哀そうに思い、永谷に連れて帰り、手厚く葬りました。

そして、滝の上の小高い丘に、祠をたてゝ水神様をお祀りしました。

この時から、村人達は、だれ云うとなく、この滝のことを、お鶴が滝というようになりました。

水神様は、毎年八月十五日を祭日として、お祭りするとともに、水難事故防止なども、お祈りしています。

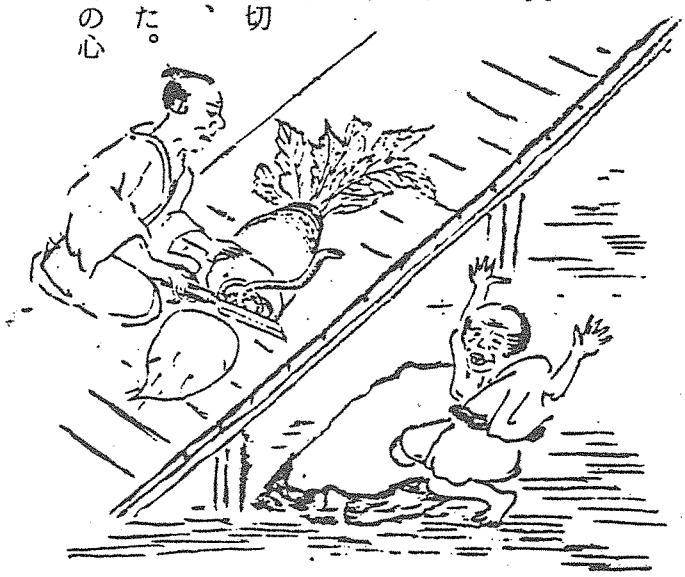
その後、滝による水の事故など一度もなく、村人は皆平和な日々を送っています。

大きな大きな大根の話

後小路　小　椋　キミヨ

昔、横筏に御殿医がおられました。大変勝れたお医者さまで、頭脳が鋭く、先々の事まで見抜くことの出来る方でした。

ある時、鳴野に住む、御殿医の召使いが、自分の畑に一かかえもある、見事な大根が出きたので、主人の御殿医様に、さし上げようといいました。まわりの者たちは、とてつもない大きな大根でしたので、大変珍しく惜しいので、差し上げるのに反対しましたが、召使いはその反対をおし切り、無理やりに、筏に侍参しました。



御殿医は、その心を大変よろこばれ、

「お前の志しは、有難くいただいたから、持って帰ってまわりの者達をなぐさめよ。」

と、申されました。しかし召使いは、無理にさし上げようと、御殿医に、くり返し申し出ました。

御殿医は、いよいよ困られましたが、しばらくめい想しておられると、台所から包丁を持ってこさせ、大根を真二つに切られました。ところが不思議なことに、大根の切り口から、一匹の蛇が飛び出しました。

御殿医は、静かに目を閉じておられましたが、そばで見ていた召使いは、びっくり仰天、腰を抜かしてしまいました。

やゝしばらくして、召使いは半ば気味悪くなり、切られた大根を、急いで持ち帰りました。

とは、一般の評判だったということです。

とんち話

後小路　小　椋　キミヨ

昔、上蓑江に中村という、大変とんちのよい人がいました。又夢判断も得意でしたので、土地の人々は、困ったり、心配ごとがおこった時には、すぐに中村翁を尋ね知恵を借りるのでした。

ある朝のことでした。一人の若者が、さもうれしそうに、ニコニコ顔で、翁を訪ずねました。

そして、自慢そうに話しました。

「私は、昨夜大変よい夢を見ました。私もこれからは、好運の道が開け、いよいよ、幸福に恵まれるでしょう。」

と、いいながら、昨夜見た夢の話をしました。

「私が、家の前の庭で、深い穴を堀っていましたところ、穴の底から、大変立派なコイが、二匹飛び上ってきました。」

と、若者は得々として、語るのでした。これを聞いた中村翁は、若者に向っていいました。

「大変お気毒なことだが、その夢は甚だ悪い夢ですよ。お前さんは、近い中に、死ぬかもわかりません。」

若者は、飛び上って驚き、

「それは又なぜですか？　コイが二匹なんですよ。目出たい、目出たいではありませんか。」

中村翁は、すました顔でいいました。

「ようく考えて見ることだね、深い穴の中から、コイ、コイだから……。恐しいことだ。」

若者の顔は、見る見る青ざめて、その場に、立ちすくんでしまったということです。

河童の腕

日向民話集より

旧家である安田家には、数多くの伝承物語りが、残っているそうですが、これはその中の一つです。

初代の平林利仲が、ある日のこと、馬に乗って出かけました。用が遅くなり、帰る途中で、夜になってしまいました。

一ッ瀬川の岸から、川の中に馬を進めもう少しで渡り終えようとした時の事です。突然に乗っていた馬が、ヒヒーンと啼いて棒立ちになり、止まってしいました。

利仲が、手綱をさばいたり、ムチを当てたりしますが、どうしても、前に進もうとしません。利仲は、しばらくじっと考えていましたが、何を思ったのか、腰の大刀をスラリと抜いて、宙空を真一文字に、気合もろとも「エイーッ」とばかりに、切りはらいました。確かに手ごたえはあった様に思えました。

と、馬はようやくにして、進みはじめたのです。

翌日、利仲は、馬を馳けて、昨夜の河原にいってみました。岸辺の付近をみますと、河童の腕が一本、ころがっているのです。利仲はその腕をひろい上げると、家にもってかえりました。

その晩のことです。真夜中頃になって、片腕のない河童が、家に訪ねてきました。河童は悲しそうな声で、頼みました。

「いたずらしたのは、私が悪うございました。どうぞお許し下さい。そして、その腕をお返しくださいませんか、三日間の中につぎたせば、元通りにすることができるのです。どうぞお願いでございます。」

と、いいましたが、利仲はこらしめと珍しさの余り、腕をかえすのをことわり、木城の比木神社へ奉納してしまいました。

その後、安田家では家人が老齢になると、きまって足が悪くなったので、河童のたたりではないかと案じておられました。

尚義先生のお母さんも、年老いられて、足を患らわれたそうです。

占師に、占なってもらうと

「家の中に悪い刀がある。それを除くように。」

とのことでした。

利仲が、河童の腕を切りはらった例の刀のことです。その刀を、母上はどこかにやってしまわれましたが、その後は、何事もなかったということです。

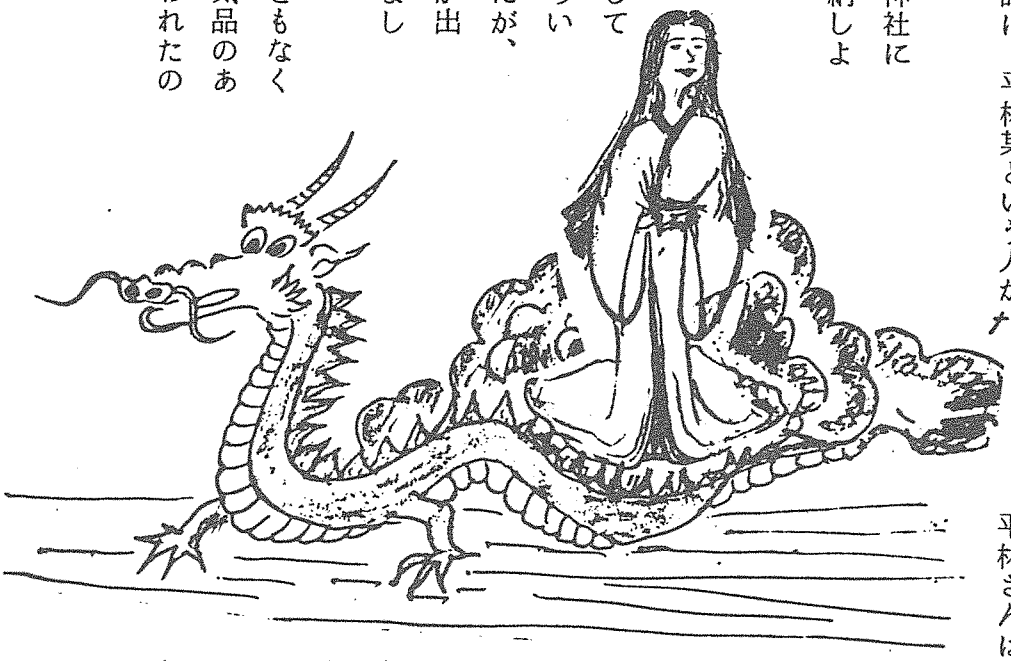
竜の絵

日向民話集より

むかし、秋月家の絵師に、平林某という人がいました。

木城村にある、比木神社に一対の竜神の絵を、奉納しようと思い、比木神社にお参りして、神殿に入り、どの様な絵をかこうかと、考えをめぐらしていました。しかし、いろいろと構想をこらしましたが、なかなか筆をとることが出来ず、思案にくれていました。

ところが、どこからともなくわき出るように、大変気品のある美しいお姫さまが現われたのです。そして、



「何を思案しているのですか。」

とたずねるのです。

平林さんは、はっと身がひきしまるような気配を感じましたが、思い切って

「竜神の絵をかいて、神様に奉納しようと構図をまとめているのですが、仲々よい構図がまとまらないので、困っているのです。」

と、答えますと、

「想像で竜をお書きになるのは、むつかしいでしょう。私がほんとの竜を、お目にかけますから、ようくごらんになっていてください。」

と、いったかと思うと、姫の姿は、たちまち、見事な一匹の大蛇となりました。

しばらくは、鎌首をもたげて、じっとしていましたが、やがて平林の前をザーザーと無気味な音をたて、神社の後を流れる川の方へと行くのです。平林が尚も目で追っ

ていると、川の淵までいった大蛇は、ザンブと川に飛びこみ、みるみる中に、深い川の淵に身を沈めてしまいました。

さんざん思いあぐんでいた平林は、神のたすけと感謝し、お祈りを終えると、早速絵筆をとりました。絵筆をとるなり、今みた大蛇の姿を、思いだしながら見事な竜神の絵を書き上げました。

平林は早速その絵を奉納し、渡り殿の天井に飾ったのでした。

この話を聞いた村人達は、神社の後を流れる川の淵を蛇が淵と呼ぶようになり、蛇が住んでいると、その付近では、水遊びをしませんでした。

又、その後他の村から流れて来た、馳け落ちの男女がやしろの渡り殿に忍び込み、一夜を過したことがありましたが、夜中にふと気がつくと、やしろの入口から、すごい大蛇が這い上がろうとしているのです。若い二人はびっくりして真青になり、近くの農家に逃げ込み、助けを求めたそうです。これはおそらく、男女の者を戒めるために、竜神が姿を現わしたものに違いないと、村人達が、うわさしたということです。

このお話に出てくる平林某というのは、安田尚義先生の十代前の祖先ですが、始め静岡に住んでおられましたが、江戸時代の頃、秋月公に召しかゝえられ、高鍋の地に来られたのです。

比木神社の竜の絵は、この平林利仲がかいたのですが、その絵は、西南の役の時、焼けてしまいました。利仲以来安田家は、代々絵師として、秋月家に仕えてきましたが、現在比木神社には、安田尚義先生の祖父に当られる、平林利仲（安田家は代々利仲を名乗った。）の書いた絵が残っています。

ひょうすんぼ石

木の瀬　壱岐継雄

木の瀬地区氏神さま、若宮神社の、お宮と並んで、ひょうすんぼ石という細長い大きい石が、お祭りしてあります。私がまだ幼いころ、父角太郎から、次の様な話を、よくきかされました。

木の瀬下の、小丸河原は、今からほぼ百年前までは、八幡瀬といってすごく川巾の広い、瀬になっていました。川の流れも、今と違って、木城高城橋の下手から、竹鳩のすぐ西側の、下を流れていました。ですから木の瀬下から竹鳩までの間は、川の流れと、石原などの、とても広い河原になっていたのです。

この川は昔から、大変水がきれいで川遊びするには、とてもよい場所になっていました。ですから、夏になると、大人も子どもも川に出て、魚を取ったり、川遊びをしたりで大変にぎわっていました。このように、村人にとっては、なくてはならない川になっていました。

ところが困ったことに、この川には〃ひょうすんぼ〃がたくさんいて、川で遊んでいる人々に、いたずらするのです。川の中で怪我させたり、引っぱり込んで溺れさせたり、その上夜になると、陸に這い上って来て、村の人々の家に、忍び込んでは、寝ている人を、だれかれといわずひっかいて、傷を負わせるのです。

村の人々は、この〃ひょうすんぼ〃のいたずらには、ほとほと困り果てました。

ある日のこと村人は、川べりにいって、ひょうすんぼを呼び出して、話しました。

「自分達は、お前達からいたずらされるので大変困っている。夜はおちおち寝れないし川での病人が、ふえる一方だ、どうかいた